

まえがき

2015年11月21日（土）、立命館大学人間科学研究所が展開する文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」プロジェクトの成果報告会（兼2015年度人間科学研究所年次総会）が、立命館大学衣笠キャンパスで開催された。本報告書はその記録である。人間科学研究所の所長を2015年度より拝命した者として、こうした報告書を刊行できることを嬉しく思う。

「成果報告会」と銘打ったとおり、本シンポジウムは、文部科学省の補助金を受けて実施された3年間の研究プロジェクトの総まとめであった。われわれはこの3年間、適切な支援によって多様な人々が社会参加できる「インクルーシブ社会」の実現に向けて、研究者と実務家が連携するための拠点形成を目指してきた。このシンポジウムでは、外部の目を交えながら、その目標がどの程度達成されたのかが批判的に検討された。

このプロジェクトは“〈学=実〉連環”を掲げている。「学」とは大学等の研究の場を指し、「実」とは実践の場、つまり現場を指している。本冊子の第1部・第2部・第3部は、プロジェクトの中で実践的な研究を行ってきた3チーム（予見的支援チーム、伴走的支援チーム、修復的支援チーム）が、それぞれ3年間の総まとめとして、「実」の視点を入れつつ行った企画である。

第1部では、予見的支援チーム企画として、高齢者支援の取組みについて研究者・実務家の立場両面から報告がなされた。第2部は、研究そのものが実践と密接に絡み合う伴走的支援チームを代表し、チームリーダーが報告を行った。第3部は対談という形式をとり、「修復」という課題を改めて考える修復的支援チームの企画が行われた。

第4部の全体企画は、チームの枠を越え、プロジェクトとして全体を総括した企画である。第4部冒頭で語られたとおり、今回のプロジェクトは15年にわたる人間科学研究所の歴史、そしてそれを支えてきた多くの研究者による研

究蓄積の上に成り立っている。その歴史に、新しい3年間を加えた今回のプロジェクトを総括すべく、チームリーダーら7人の研究者がパネルディスカッションを行った。

附録として収録した「ポスターセッション抄録集」は、本シンポジウムで報告されたポスター発表の紹介である。プロジェクト内外の研究者・実務家がインタラクティブに意見交換する場として設けられ、多様なテーマで17本の報告がなされた。このセッションは立食式のランチョンセミナーの形式をとり、和やかに打ち解けた雰囲気なかで、多くの方が発表者に熱心に質問したり、ポスターを前に議論したりと、活発な研究交流が行われた。

シンポジウムの最後には、プロジェクトの外部評価委員として招聘した3名の有識者から、それぞれ貴重なご意見や今後に向けてのご助言をいただいた。

このプロジェクトでは、プロジェクトにかかわる様々な研究の記録を本冊子のような『インクルーシブ社会研究』として逐次刊行してきており、その全てを人間科学研究所のウェブサイト (http://www.ritsumeihuman.com/publications/index/cat_id/35) で公開している。3年間で15号に渡ったその内訳は、以下のとおりである。

全体で企画した公開研究会の記録を元にしたもの

第3号・4号・8号・15号

各チームで企画された研究会等の記録を元にしたもの

第1号・2号・5号・6号・7号・10号・11号・12号・14号

3年間の活動のまとめなど、総括的なもの

第9号・13号

これらの記録は今後の議論の発展のための貴重な資料であり、プロジェクトの研究成果が地域や社会に広く公開・還元された証でもある。本冊子もまた、インクルーシブ社会の実現、〈学=実〉連環、あるいはそれらに関わる様々な活動が前進するための一つの礎となることを願ってやまない。

最後に、シンポジウムでご登壇をいただいた方々、ポスターセッションの発表者、外部評価委員の先生方および報告会・総会に参加された聴衆の皆様、さらにシンポジウム運営と本誌編纂にご尽力いただいた、人間科学研究所事務局の片山詩朗氏はじめ立命館大学リサーチオフィスの関係者にこの場を借りて感謝申し上げます。

立命館大学 人間科学研究所 所長
(同 先端総合学術研究科 教授)
松原 洋子